解体される“Posing Wilde”

河　内　恵　子

最近注目されている文学研究の方法のひとつに身体論がある。オスカー・ワイルドの文学世界を「身体」というアスペクトから考察すると何が見えてくるのだろうか。司会と講師をつとめることになった私は、おそらく私自身とはまったく異なった視点からこの問題を論じてくれるであろう3人の研究者にシンポジウムへの参加をお願いした。期待していたとおりに、いやそれ以上に、非常に興味深い論が展開された。

阿部公彦氏は『サロメ』をテクストに用い、サロメによるヨカナーンの「首切断」という身体破損が如何なる意味を後の芸術作品に伝えるのかということを、現代アートをも射程に入れて論じた。真屋和子氏は同じく『サロメ』をテクストに「踊るサロメ」に着目し、その存在意義をフロベールやユイスマンスの文学世界にまで求めた。玉井暲氏は批評というジャンルにおける「ワイルドの修辞的身体」の魅力を丁寧に探査した。そして私は、posingすることで19世紀末のイギリス文壇に登場したワイルドの、自らの肉体を使った戦略について考察した。

1878年11月にオックスフォード大学から文学士号を授与されると、ワイルドはすぐさまロンドンへむかった。仕事もなければ経済的援助もなく、あるのは根拠のない自信だけだった。学生時代に書きためた詩はあったが、何編かが文芸誌に掲載されたにすぎなかった。社交界でも文壇でも世間一般でも、どこの世界でも構わないから、有名になることが最重要課題だった。しかし、名前を売るにはどうすればよいのだろうか。まずは時流に乗ることが大切だった。芸術や文学の動きを見極め、どこに身をを置くかを決断する必要があった。

1870年代に、伝統的な芸術様式に反しているとして保守的な人々の批判の対象となっていたのがロセッティ（Rossetti, Dante Gabriel 1828-82）やスウィンバーン（Swinburne, Algernon Charles 1837-1909）であり、彼らの芸術世界は‘affected’ ‘self-conscious’ ‘narcissus-like’ ‘effeminate’といった言葉で形容されていた。1874年には*Punch*がその誌上において‘chinamania’という造語を使って、社会の一部でみられ

る「白と青の陶器の収集」に夢中になっている人々を諷刺した。1876年に出版されたマロック（Mallock, William 1849-1923）の小説 *The New Republic* ではペイター（Pater, Walter 1839-94）やラスキン（Ruskin, John 1819-1900）やジャウエット（Jowett, Benjamin 1817-93）が諷刺の対象となっており、ワイルドはこの作品を 'very clever' と賞賛していた。ダブリンのトリニティ・コリッジ時代からオックスフォード大学時代にかけて、ワイルドはヴィクトリア朝時代の常識的世界観のなかで、何が揶揄され何が諷刺の対象となっているのかを見極めていた。ラスキンやペイターのもとで学び、その強い影響力を受けたワイルドが伝統と常識で武装した人々に揶揄される側の人間であったのは当然のことだが、彼は積極的にその役割を引き受けた。そうすることが、ロンドンで有名になる最も簡単な方法だったのだから。

しかも、1880年代はワイルドにとって幸運な時となった。この頃から aestheticism や aesthete という語が諷刺的意味合いを伝える言葉として使われるようになったのだ。*Punch* ではデュモーリエ（Du Maurier, George 1834-96）が aesthete を対象にした一連の戯画の制作を始め、1881年4月には、ギルバート（Gilbert, William 1836-1911）とサリヴァン（Sullivan, Arthur 1842-1900）によるコミックオペラ *Patience* が aesthete を諷刺する作品として大きな反響を呼んだ。ワイルドはこの機会を巧みにとらえた。揶揄や諷刺の対象となっている aesthete の pose をとることで、世間の注目を浴びようとしたのだ。そして、彼の計画は思惑どおりに展開していった。

デュモーリエが当初、諷刺の対象としていた aesthete はスウィンバーンだったが、ワイルドがロンドン社会のさまざまな場面に唯美主義的な服装で登場し、刺激に溢れた言動を繰り返すようになった時、その対象はワイルドへとうつっていった。これこそが、ワイルドが意図したことだった。*Patience* もワイルドだけをモデルに創られたわけではない。このコミックオペラは、当時、増加しつつあった 'affected' 'self-conscious' 'narcissus-like' 'effeminate' な芸術家気取りの若者たちを笑いの対象に据えていた。そして、この作品のアメリカ公演が決定した際、その準備としてアメリカ人に aestheticism を紹介する必要がでてきた。その役をワイルドが引き受けた時以来、*Patience* とワイルドの名前は固く結ばれてしまったのだ。「*Patience* の主人公バンソーン」として、そして「*Punch* 誌上で諷刺される唯美主義者」としての posing の人生が始まった。しかし、1年あまりのアメリカ講演を消化する過程で、唯美主義思想は洗練され、ワイルド独自の芸術論の土台が形成されていった。Posing から哲学が生まれたのだ。

このように始まったワイルドの創作活動は *Punch* を代表とするジャーナリズムと一体化して展開するかのようだった。創作活動だけではない。さまざまな場面での彼の言動がジャーナリズムの糧となった。作品も多くの読者を得るようになったが、ワイルドという名前とその言動の方が、広く伝わっていた。Posing と実体との境界線はだんだんと曖昧になっていった。それはジャーナリズムがつくり出すワイルドと posing するワイルドとほんもののワイルドの差違が消滅していく過程であり、おそらくは、本人にも明確には認識できないオスカー・ワイルド像が現出し、ナイーヴな posing Wilde が解体されていく道程でもあった。Posing することによって世間に出たワイルドは、ジャーナリズムを利用して社会の階段を駆け上がったかにみえたが、ジャーナリズムに利用され、結局は解体されてしまったのだ。

ここで posing Wilde の歴史を視覚的媒体を使って確認しておこう（36頁参照）。

ワイルドの身体は美しい posing から始まり、諷刺画家によってさまざまに変化させられていく。この解体の行程に終止符が打たれるのは、1895年に同性愛の罪でワイルドが逮捕された時である。法廷や獄中のワイルドは等身大に描かれ、辛らつなカリカチュアはみられない。Posing をしない、あるいは、できないワイルドは、もはや諷刺の対象になりえなかった。それは、posing から生まれる芸術活動の終焉を意味していた。

Bibliography

Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Hamilton, 1987.

Holland, Merlin, and Rupert Hart-Davis, eds. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. New York: Holt, 2000.

-----.*The Wilde Album*. London: Fourth Estate; 2003.

Sinfield, Alan. *The Wilde Century: Effeminacy, Oscar Wilde and the Queer Moment*. London: Cassell, 1994.

Wilde, Oscar. *Collins Complete Works of Oscar Wilde*. 1948. Introd. Merlin Holland. Glasgow: Collins, 2003.

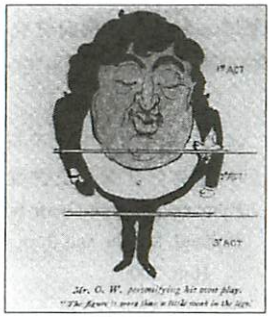
1「美の詩人」
By Alfred Thomson from *Time* 1880年。

3 唯美主義的服装のワイルド。アメリカ講演中。
By Napoleon Sarony 1881年。

2 アメリカ講演旅行に出発直前の'The Professor of Aesthetics'の姿。1881年。

4『サロメ』執筆中のワイルド。
By Aubrey Beardsley 1892年。

5 *Lady Windermere's Fan* の初日の舞台挨拶に煙草を吸いながら登場し、横柄な挨拶をしたとして批判された。
By Bernard Partridge from *Punch* 1892年。



6 *The Importance of Being Earnest* の面白さが一幕ごとに失われていく様子をワイルドの肉体で表現している。
By Harry Furniss 1895年。